

成長につなぐ — 事例17ゴールズ&169ターゲット

277

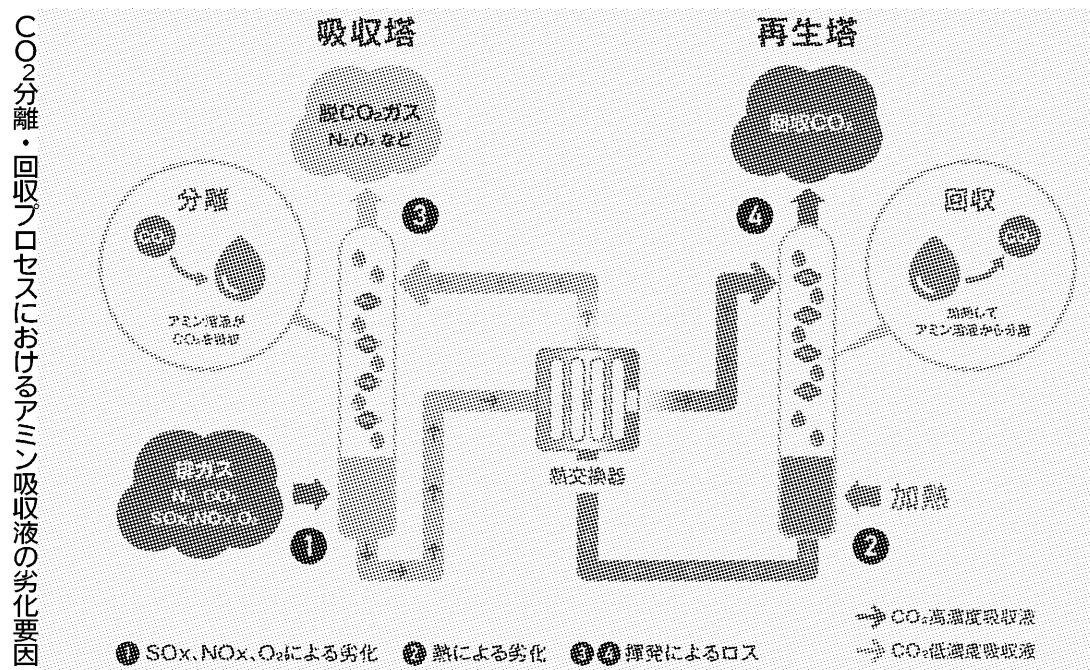
中外テクノス

中外テクノス(広島市西区、福馬聡之社長)は、二酸化炭素(CO₂)の回収・貯留(CCS)といったカーボンニュートラル(温室効果ガス排出量実質ゼロ)技術の分析や性能評価などの事業を始めた。CCSはエネルギー・金属鉱物資源機構(JOGMEC)が国内で九つのプロジェクトを進行中で、2030年の事業化を目指している。火力発電所の排ガス分析・評価などで培った技術を生かし、新たな事業の柱に育成する方針だ。

中外テクノスは1953年(昭28)創業で、大気や水質、土壌など各種の調査や分析を手がける。北は北海道から南は沖縄まで拠点を置き、従業員は約1100人と独立系の分析・調査会社では国内トップクラスの規模。

カーボンニュートラル技術の社会実装に向けて24年に環境事業本部内にカーボンニュートラル推進室を新設した。

カーボンニュートラル技術の分析・性能評価



同事業部内の社員16人が兼務する形で所属。CCSやCO₂の回収・利用(CCU)、水素やメタネーション、資源循環、バイオマス発電、環境影響評価などの事業を展開する。

25年8月に専用のホームページ

CO₂回収・貯留などで分析技術開発



LCI-MS/MS、SLC-MS/MSを用いてアミン吸収液を定量分析

「CN Lab.」を開発したところ、「CCSに関する問い合わせが目立って多い(鎌田茂樹カーボンニュートラル推進室長)」という。

政府は30年度に温室効果ガス(GHG)を13年度比46%削減する目標を21年に策定した。だが、水素やアンモニアなど次世代燃料はコスト面などに課題があり導入が進んでいない。

一方、CCSもCO₂削減の有力な手段として注目されており、JOGMECが事業化に向けた先進的な取り組みとして9プロジェクトを選定。各事業者が事業化に向けて調査、検討を進めている。

中外テクノスのCCS関連事業はCO₂の回収から地下への貯留まで各段階での環境影響評価をはじめ、CO₂分離回収に使用するアミン類の分析など幅広く網羅する。アミン類は排ガスに含まれる硫酸化物(SO_x)や窒素酸化物(NO_x)などの影響で品質が劣化するのが課題とされる。

ただ、アミン類に含まれる多様な成分を分析するのは極めて難しく、「試行錯誤しながら分析を行っている」という。ここで貢献しているのが23年に新設した分析開発グループだ。このグループは公定法のない分析方法について、新しい分析技術を開発している。CCS関連のほか、有機フッ素化合物(PFAS)関連の分析技術を開発し、同化合物の分析も手がけている。

GHGは30年度の46%削減目標に向けて事業者の動きが今後活発になると予想する。法整備など国の動向も注視し、さまざまな状況に対応できる体制を構築する考えだ。